

言語的意味の規範性と意味理解の理論

田中凌

コネチカット大学

ある言語表現が何を意味するか（そして私がそれを使用することによって何を意味するか）、ということの哲学的説明には規範的概念が用いられなければならない、という見解は様々な哲学者によってしばしば提案、また擁護されてきた。現代におけるこの議論のひとつの主要な源泉となっているものには、Kripke (1982) の議論がある。ウィトゲンシュタインによる「ルールに従って」言語を使用することについての議論にインスピレーションを得て Kripke は、「私が〔ある言語表現によってあることを〕意味しているということと [...] 私が何も意味していないということとを区別する私についての事実は存在しない」(p.21) とか、「意味を [...] 帰属する言明はそれ自体意味を欠いている」(p.75) とかといった、言語表現の意味を決定する事実の存在についての懐疑的な結論へと至る議論を提示した。

Kripke の議論の内実が実際にどのようなものなのかについては様々な解釈がある。標準的とされる諸解釈が一致を見ているのは、Kripke の議論は表現が何を意味するのかを決定する事実の有無について問う、形而上学的・存在論的な議論だということである。¹本発表ではしかし、Guardo (2012, 2014) を導きの糸として、Kripke の議論には意味理解についての認識論的な問題も内蔵されているということを論じる。より具体的には、言語表現の意味を理解しているということは、その表現の意味についての知識を持っていることだ、という直感—そしてその知識は観察や推論によらないものだという関連した直感—を文字通り捉えようとした際に生じる哲学的な困難が、Kripke の議論には内蔵されていると論じる。

この論点は、ある言語表現の意味を理解しているということは、それを特定の仕方で使用する傾向性を持つことだとする「傾向性説」に対しての Kripke の反論に特に明確に現れている。ある状態が「知識」と呼べる状態であることは、主体がその状態の有する内容にアクセスし、それを例えば自分の行為の理由として提示できる、といったことを最低限必要とするように思われる。Kripke の議論に内蔵されている意味理解についての認識論的問題とは、言語表現の意味を決定している事実が仮にあったとしても（例えばそれが言語表現の使用の傾向性についての事実だったとしても）、そういった事実を果たして主体は認識論的にアクセス出来るのかという懸念から生じる問題である。例えば、主体が一般に自身の言語使用の傾向性について（推論や観察に基づかない）知識を持っているという主張は擁護しがたい。そしてこのことは、主体は自分が使用できる言語表現の意味について（推論や観察に基づか

¹ ひとつの解釈によれば、意味についての事実は規範的なものであるという論点が、規範的事実の存在論的身分の説明には一般的な哲学的困難があるという論点と結びついて、Kripke の議論を構成している (cf. Hattiangadi (2007), ch. 3)。

ない) 知識を持っているという直感と、緊張関係に立つように思われる。

Kripke の議論に含まれる意味理解についての認識論的問題をこのように再構成した後、本発表ではそれを一般化し、言語理解に対する経験科学的アプローチにも同様の問題を問うことが出来るということを論じる。発表者の考えでは、この問題が最も浮き彫りになるのは、Chomsky の生成言語学の枠組み内での意味論的探求がコミットしている、ある経験的な仮説に焦点を当てることによってである。²その仮説によると、言語学が探求の対象とするのは、主体に言語理解・使用を可能にしている能力 (competence) の構造であり、これは主体の内部に認知的な構造として心理学的に実在するものである。その認知的な構造はしかし一方で、主体が反省的にアクセスできるようなものではないとされる。この点は、主体と言語を可能にしている認知的構造との間の関係を記述するのに、Chomsky が「知っている (know)」とは区別されるべき関係としての「cognize」というテクニカルタームを使用することを提唱したという事実にも現れている (cf. Chomsky (1986); Smith (2008))。

最後に、この意味理解にかんする認識論的問題についての可能な解決策を模索する。まず、以上の議論が正しければ、この問題の解決・解消は、(直感によれば) 我々が持っているはずの意味についての知識と、実際の言語使用の基礎になっている認知的構造との関係とを問うことを必要とする。本発表は、後者が前者の理由・正当化として機能することで、前者に知識の身分を与えるという考え方は誤っていると提案する。そうではなく、後者が前者に対して立つ関係は因果的なものであり、問われるべき問題は、なぜその事によって後者は前者に対して知識という身分を与えることができるのかである、と論じる。最後に、時間が許せば、出発点である Kripke の議論の枠組みでこれらの論点を表現し直すことも試みる。

参考文献

- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Westport, CT: Praeger.
- Guardo, A. 2012. "Kripke's Account of the Rule-Following Considerations," *European Journal of Philosophy*, 20(3), 366-388.
- . 2014. "Semantic Dispositionalism and Non-Inferential Knowledge," *Philosophia* 42, 749-759.
- Hattiangadi, A., 2007. *Oughts and Thoughts*. Oxford: Oxford University Press.
- Kripke, S. 1982. *Wittgenstein on Rules and Private Language*. Oxford: Blackwell.
- Wright, C., 1989. "Wittgenstein's Rule-following Considerations and the Central Project of Theoretical Linguistics," In A. George (ed.), *Reflections on Chomsky*, Blackwell.
- , 2007. "Rule-Following without Reasons: Wittgenstein's Quietism and the Constitutive Question," *Ratio*, 20 (4): 481-502.

² Kripke (1982) を源泉とする議論においてこの点はほとんど論じられていないが、例外としては Wright (1989, 2007) などがある。しかし、Kripke 自身は脚注で関連する論点に言及している (p.72, p. 97 など)。